

令和 8 年産

仙南大豆情報(第 1 号)

令和 8 年 7 月 29 日 発行
宮城県大河原農業改良普及センター
TEL:0224-53-3496
Fax:0224-53-3138
E-mail:oknkt@pref.miyagi.lg.jp

6月以降の気象経過

6月:平均気温は平年並みですが、寒暖差が激しく、播種直後の発芽・初期生育に影響しやすい推移でした。

中旬までは少雨で推移しましたが、21日の大雨で、停滞水が発生したほ場では、湿害により出芽不良が見られました。

7月:平均気温が平年値から2.3℃高く、高温で推移しました。そのため、平年よりも開花期が早まる可能性があります。
13日以降は少雨で経過し、ほ場は乾燥気味でしたが、25・26日にまとまった雨が降ったことで、一部ほ場で停滞水が確認されました。

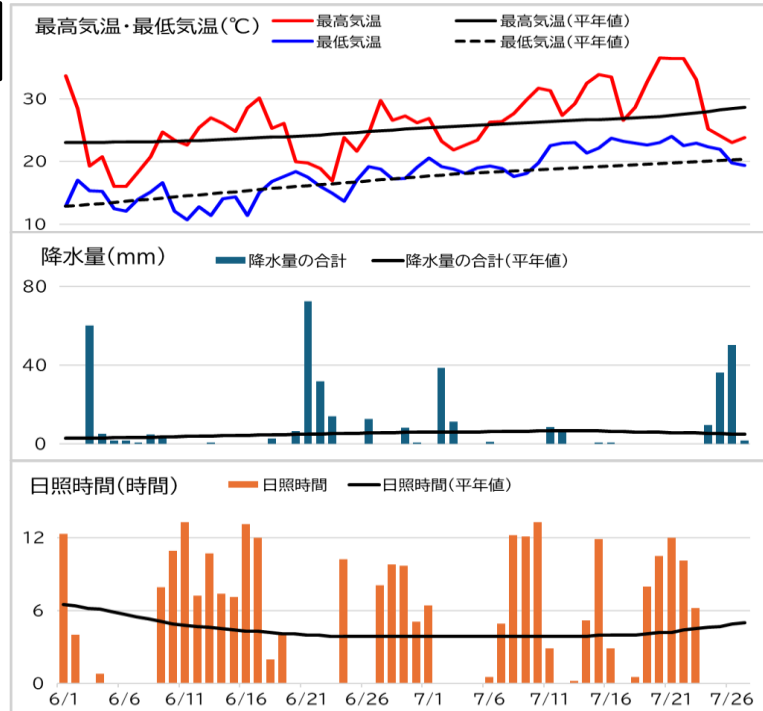


図1 気象経過(アメダス丸森 6/1~7/26)
(上:最高・最低気温 中:降水量 下:日照時間)

管内の大豆状況

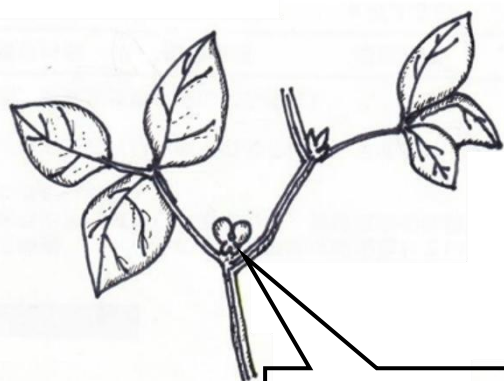
大豆の播種作業は6月上旬から始まり、大雨の影響で作業が停滞する時期がありました。
播種直後に大雨を受けたために、生育ムラがあるほ場が多く見られます。
今年の7月は前年と同様に高温のため、7月下旬時点の生育は平年よりも早くなっています。
表1 生育調査結果(7月23日調査)

品種	調査地点	区分	播種日	主茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)
あやこがね	大河原町金ヶ瀬	本年値	6/15	37.0	9.5	2.4
		前年差	2日早い	+0.5	-0.3	-0.8
		平年差	1日早い	+5.7	+0.5	+1.9
ミヤギシロメ	大河原町金ヶ瀬	本年値	6/20	25.9	7.7	0.3
		前年差	1日早い	-16.0	-2.5	-0.4
		平年差	4日早い	-3.8	-0.3	-0.1

※1 平年値:R3~R7の5年平均。

※2 「-」は早い、短い、少ない、「+」は遅い、長い、多いを示す。

開花期の確認



株内の最初の開花

図2 開花始めの模式図

開花期は、中耕培土・茎葉処理剤散布の中止や、病虫害防除の適期を示す重要なタイミングです。開花はほ場の外からでは判断しにくいので、必ずほ場の中に入って観察し、開花期を確認して今後の作業日を決めましょう。

開花始め:ある株で、最初に開花が見られた日

開花期:開花始めが見られた株が40～50%に達した日

表2 生育調査ほにおける播種日と開花期

品種	播種日(平年値)	開花期(平年値)
あやこがね	6/16	8/2
ミヤギシロメ	6/24	8/10

※生育調査ほ:大河原町金ヶ瀬

※県が推奨する播種時期:5月下旬～6月上旬

今後の作業

1. 中耕培土

倒伏防止、不定根の発生による生育促進・増収、通気・排水の改善、除草等の効果があります。

開花期後の中耕・培土は、主茎や分枝の損傷、断根により生育に支障を来します。**開花始めの10日前まで**には終わるようにし、ほ場内で開花が見られた場合は、作業を中止するようにしてください。

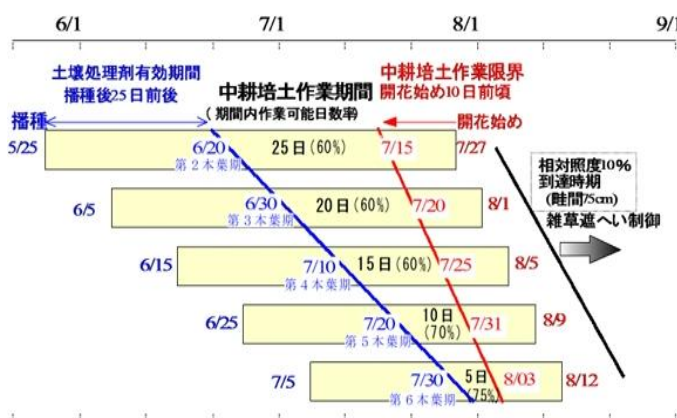


図3 中耕培土作業が可能な期間のめやす
(みやぎの大豆・麦類栽培技術指導指針より)

2. 追肥

大豆への追肥は二通りの目的で行われます。

- ① 開花期～子実肥大期での窒素供給
- ② 湿害で根粒菌の活性が低下した際の被害軽減

①では、開花期後に緩効性の被覆窒素肥料を施用します。

施肥量の目安は窒素成分で2～5kg/10a程度です。

地力の豊富なほ場では効果が低いので、ほ場条件を考慮して追肥の有無を決定しましょう。

②では、生育不良や湿害が見られるほ場に、硫酸などの速効性肥料を施用します。

施肥量の目安は窒素成分で3kg/10a程度です。

根粒菌が十分についたほ場では、窒素過剰により根粒菌の働きが低下する恐れがあります。

また、停滞水が残っていると、酸素不足で根や根粒菌が窒素を上手く吸収することが出来ません。

生育状況を確認し、溝切りなどで停滞水を排水したうえで追肥を行うようにしましょう。

3. 雑草防除

大豆バサグラン液剤の全面散布の使用時期は開花前までです。

開花後に散布すると、薬害により減収につながります。

ほ場内で開花が見られた場合は、散布を中止するようにしてください。

4. 病害虫防除

(1)害虫

● ウコンノメイガ

防除時期：着莢期から莢伸長期の始め（開花期後2～4週間）

幼虫の葉巻の形成や葉の食害によって、子実の小粒化と減収をもたらします。

8月第1半旬に葉巻が多数見られた場合は、速やかに薬剤防除を実施しましょう。



図4 ウコンノメイガ(左:幼虫 右:葉巻) (みやぎの大豆・麦類栽培技術指導指針より)

● タバコガ類

防除時期：着莢期から莢伸長期の始め（開花期後2～4週間）

突発的に多発して、葉や莢を食害します。

播種時期が遅いほど発生密度が高くなりやすく、ミヤギシロメで高くなる傾向にあります。

幼虫が成長するにつれて薬剤効果が低下するので、散布時期を逃さないようにしましょう。



図5 オオタバコガ(左:成虫 右:幼虫)



図6 ツメクサガ(左:成虫 右:幼虫) (みやぎの大豆・麦類栽培技術指導指針より)

- マメシンクイガ

防除時期：1回目…8月下旬、2回目…1回目の7～10日後(9月中旬)

幼虫が莢に侵入し、子実の縫合線に沿って食害します。

連作ほ場で多発しやすく、特に4年目以降から急増するため注意が必要です。



図7 マメシンクイガ(左:成虫 右:加害中の幼虫と被害粒) (みやぎの大豆・麦類栽培技術指導指針より)

- フタスジヒメハムシ

防除時期：子実肥大期(開花期後4週間以後)

成虫が茎葉と莢を食害し、黒斑粒や腐敗粒が発生して品質低下につながります。

平年ですと、8月下旬～9月上旬に発生ピークを迎えるため、適期防除に努めてください。



図8 フタスジヒメハムシ(左:成虫 中:幼虫 右:食害痕) (みやぎの大豆・麦類栽培技術指導指針より)

- 吸汁性カメムシ類

防除時期：1回目…着莢期(開花期後2～4週間)、2回目…子実肥大期(開花期後4週間以後)

莢が付き始めたころからほ場へ飛来して吸汁加害を始めます。

雑草地や山林の付近では発生が多くなるおそれがあるので注意しましょう。



図9 ダイズを加害する主要な吸汁性カメムシ類

(左:ホソハリカメムシ 中:イチモンジカメムシ 右:ブチヒゲカメムシ)

(宮城県病害虫防除所 令和7年度 防除情報第7号より)

(2)紫斑病

防除時期：開花期20～35日後

収穫時期に連続した降雨が続くと発生が多くなります。

紫斑病抵抗性は、ミヤギシロメ・すずみのりが「強」、あやこがね・タンレイが「中」です。

「中」の品種は1回目の防除の7～10日後に、2回目の防除を行いましょう。

耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用は避けてください。

※県内で Qoi 剤の耐性菌の発生が確認されています。

前年に紫斑病が多発し、薬剤の効力低下が見られた場合は、他系統の薬剤に切り替えてください

5. 乾燥・湿害対策

(1)乾燥対策

大豆は開花期以降、多くの水を必要とし、不足すると落花・落莢や百粒重の減少により減収しやすくなります。晴天が10日以上続き、過乾燥となる恐れがある場合は、暗きよの水閘を閉じて水分保持(地下かんがい)する等の対策を行ってください。

畝間かん水が可能な場合は実施しましょう。ただし、水が停滞すると湿害を招く恐れがあります。

特に大区画ほ場では湿害を避けるため数回に分けてかん水を行いましょう。

(2)湿害対策

台風や局地的な大雨に備えて、雨が降る前に湿害対策をとることが重要となります

水がほ場外に停滞することがないように、明渠が排水路に繋がっていることや、雑草や土砂で排水路が詰まっていないかを、ほ場を見回って確認するようにしましょう。

湿害で生育不良が見られた場合は、「2. 追肥」の項目を参考に、速効性肥料の施用を検討しましょう。